農業土木を支えてきた人々

大谷休泊と休泊堀

久保田　栄　繁*

I. まえがき

県立図書館に行き休泊堀の開削に関する参考書の閲覧を申込んだところ，担当の方から「待矢場両堰々史・山田郡誌・休泊村誌・邑楽郡誌等に記されているが，尾崎一保先生が調査して発表されている“大谷休泊をめぐる今昔の歴史”を見られるのがよいのではないか」といわれたので，早速閲読した。尾崎先生は，その本の冒頭に，20年近く調査しても大谷休泊の生地や親兄弟，はては休泊堀という大事業をどのような測量や工法に従ったかが明確ではない，と書かれており，休泊堀関係の資料が残されていないことを知った。したがって，先生の調べられた内容を主体に書かせていただくこととした次第である。

II. 大谷休泊

大谷新左衛門，のちに休泊と号し，大永元年（1521）に生まれたということである。

休泊は現在の藤岡市にあった平井城の上杉憲政に仕えており，天文21年（1552）上杉家が北條勢の猛攻により落城，憲政は越後の長尾景虎のもとに逃れてしまった。ときに休泊32才であった。一説によると，休泊は奉行職であったが，軍役についておらず，土木や勧農事業の優れた技術者であったために助命され，北條氏に属した新田金山の由良氏に請われて，東毛の地山田郡に居を構えたといわれる。その後，由良氏の実弟である館林城主長尾顕長の招きに応じて多々良沼南縁の現在の館林市成島に移り住んだといわれている。

また，「待矢場両堰々史」（大正11年刊）によると，

“足利城主長尾但馬守顕長ニ仕ヘ，元亀元庚午年新田金山城主由良信濃守成繁ノ臣，荒山小左衛門ト共ニ奉行職ヲ得ル”

とも記されている。

戦乱の世にあって，開墾・植林といった平和的な事業に生涯をかけた数少ない技術者の一人であったといえる。

館野ケ原の植林（後述）がほぼ完成した天正6年（1578）7月，休泊は病床に臥したが，成島在住以来休泊の下で人夫頭をつとめてきた熊倉善三郎の手厚い看護にもかかわらず，2カ月を経ずして8月29日に58才の生涯を閉じた。善三郎は居宅の近くに墓地を設けるとともに，自らの実子を別家させ，正妻のなかった休泊の妾腹の子作太郎を養子にした。以後熊倉家は代々大谷原の御林守となり墓地の管理にあたった。丹寂大谷休泊関月居士と刻まれた休泊の墓碑は，昭和28年に県の史跡に指定されている。

III. 休泊堀

館林誌に休泊は，

“築法と絵図水盛役人5郡内田畑新開発可仕旨，両城より仰付けらる”

とあり，休泊堀開削事業を担当したことを物語っている。

尾崎先生の調査によれば，休泊堀の事業に着手したのは永禄元年（1558）で，休泊が37才の時であった。事業着手の翌年6月28日には，金山の城主由良成繁は上杉謙信に城を攻められているが，幸い天運にも恵まれ敵を撃退したことで無事事業は進められたとされている。

しかしその後のことは，休泊が工事現場を見回っているうちに居館が全焼したので，すべての記録が灰となってしまい，事業の計画も工法も繰出された人夫や工事材料・費用のことも全くわからないものとなってしまった。

上毛篤農伝には，

“群馬県山田郡旧毛里田村を渡良瀬川の取水（入）口と

* 前・群馬県耕地建設課長（くぼた　えいしげ）

し，旧太田町の金山の後方を東に進み，新田・山田・邑楽の三郡に水路を伸ばす”とあり，さらに，“永禄元年とりかかり天正5年終了，同6年つまり翌年休泊永眠する”と記されており，休泊堀のことは，“現在の矢場堰のもとが休泊堰なり”
としている。

なお，大正5年の建立である待矢場両堰改築記念碑には

“其の（新田堀）下流に在る者を呼んで矢場堰と曰い，閘を毛里田村に置いて以って三郡（新田・山田・邑楽）の各町村潅漑の用に充す。俗に休泊堀と称す。以って多々羅村（旧多々良村）人大谷休泊の開鑿する所也”
とある。

尾崎先生の調査によれば，工事に入る前の調査はかなり慎重に行われたようだ。開田地帯をほぼ邑楽郡下に定め，南西部と南部に分けている。現代的にいえば南西部が第一期工事，南部が第二期工事となり，第一期分を上休泊堀，第二期分は下休泊堀，と後日呼ばれている。

邑楽郡明和村新里の瀬下芳夫氏所蔵の館林領五郡農家水配鑑を見ると，上休泊堀は現太田市毛里田地先で渡良瀬川から取水し，旧毛里田・韮川・休泊・九合・小泉・大川・永楽・富永の町村を通り，旧佐貫村の大佐貫地内で下休泊堀に流入するという絵図となっており，その距離はおよそ 24 km で，下休泊堀は多田良沼（多々良沼）の南端から，旧中野・長柄・三野谷を経て，旧佐貫村地内で上休泊堀の落水を受けさらに東流し，旧梅島・千江田の両村を流下し，旧大箇野村地先において谷田川に接続して終末となっており，その距離はおおよそ 16 km となっている。

尾崎氏は，“上休泊堀が取水口から旧小泉町方面に向って直線コースとせず堀を金山に近づけたのは，将来を見通した計画でもあったように思う。というのは，後に居を構えた館林市成島を中心に大谷原と呼ばれる一大松林を造成しているが，その松苗は新田金山から運んだものといわれている。金山から苗を運ぶためには片道4里（16 km）の行程を人足に頼らなければならない。それは大変なことであるとの観点から，堀を金山附近に廻し，その支線を成島に通じ，松苗をその水路に浮かべて流すことをあらかじめ考えていたように思われる。もしこの推定が当っているとしたなら，大谷休泊という人物は，計画に当って慎重な構えをした肝のすわった，そして何10年先をも見透す明晰な頭脳の持主であったばかりではなく，武士でありながら心底から武士による争闘の明け暮れを見限って，勧農こそ自分の生きる道であり，休泊堀は多くの人の利益をもたらす事業であるという信念を持っていた人間であったといえる”と賞讃している。

休泊堀の完成により，295町6反歩の開田が進んだといわれている。用水開発後約270年の天保10年（1839）には下流地域の用水不足を解消するため，休泊堀の補給用として利根川から取水する利根加用水が開削されているが，それより約10年後の嘉永3年の記録によると，上休泊堀は上小泉村から大輪村に至る17カ村599町歩，また下休泊堀は19カ村497町歩を潅漑していると記されており，館林領五郡農家水配鑑による上・下休泊堀の潅漑

表-1 主 要 な 経 過

西 歴	年 号	事 項
1570	元亀元年	荒山小左衛門，大谷新左衛門ともに奉行職となり新田堀，休泊堀を開削。
1583	天正13年	北條氏の領地となり，山上五郎衛門，清水藤左衛門水方普請役となる。
1590	〃 18年	北條氏破れ古河城主土井大炊頭26年間および家臣出役させ用水惣普請を行わせる。
1615	元和元年	松平和泉守，館林城主となり，普請役大岡重兵衛，志村与市衛門，矢場堰水門を創設する。
1661	寛文元年	徳川綱吉館林城主となり，1662年斉藤八郎衛門水方奉行普請役となる。
1681	天和元年	徳川綱吉5代将軍となり分地のため水方奉行いなくなる。ために用水堰の管理が困難となり，願出により，幕府直轄となる。近藤（館林市）に宿舎を設け出後廻勤する。82年以降江戸表より直接出役となる。
1839	天保10年	休泊堀末流用水不足のため，古海村名主白石弥五衛門外連名にて利根川よりの取水を嘆願し，利根加用水路を開削。
1868	明治元年	岩鼻および館林藩の管理となり，1870年見試とし3組合に分つ。
1871	〃 4年	栃木県の所管となり各組合民費支弁を仰付けられ，事業は関係町村費をもって経営することとなる。1876年群馬県の所管に移る。
1877	〃 10年	干ばつのため待堰，矢場堰の間に水争い起き，群馬県令により和解，両組合が合併し，待矢場両堰組合が設けられた。
1882	〃 15年	区町村会法発布により，新田，山田，邑楽3郡長のもとに待矢場両堰組合水利土功会を組織し，1889年市町村制実施以後新田郡長の理管となる。
1893	〃 26年	水利組合法令発布により，待矢場両堰普通水利組合を組織し，新田郡長管理者となる。
1914	大正3年	待堰，矢場堰大改築により鉄築コンクリート造りとなる。
1926	〃 15年	郡制廃止に伴い管理者は太田町長となる。
1951	昭和26年	土地改良法の公布に伴い待矢場両堰土地改良区に改組。

表-2　主な改良事業

事業名	工期	事業主体	事業目的	事業量	事業費	受益面積
					千円	ha
待矢場下流部用水改良	昭和2～4	群馬県	休泊堀末流用水不足のため利根川より揚水補給	揚水機場 1 用水路 2.7km	190	740
阿左見東 相生両貯水池用水改良	8～13	〃	渡良瀬川の渇水対策，植付期の用水補給	貯水池 2	735	6,240
待矢場両堰用水改良	15～18	〃	用水対策，地区内用水幹線改修		208	4,520
休泊堀用排水改良	17～28	〃	用排水の改善，休泊堀改修	水路 8.6km	110,772	2,128
渡良瀬川右岸土地改良	27～34	〃	用水不足と鉱害対策	取入口 1 集水暗渠 0.6km， 用水路 3.7km	155,066	5,768
渡良瀬川沿岸農業水利	46～59	〃	渡良瀬川河床低下対策，取入口の合口，新規開発	頭首工 3 用水路 51km	19,300,000	9,620
公害防除特別土地改良	55～工事中	〃	重金属による土壌汚染防除	現状回復 41.8 ha 区画整理 289.9 ha	6,186,000	332

表-3　待・矢場両堰用水灌漑面積の変移

項目＼年次	1899年（明治32年）	1931年（昭和6年）	1951年（昭和26年）	1984年（昭和59年）
区域(旧町村数)	3市5町(24)	3市5町(24)	3市4町(20)	3市5町(23)
灌漑面積 (ha)	4,811	6,890	5,824	5,100
同上増減 (ha)	—	2,079	△ 1,066	△ 724
組合員数 (人)	(1903年) 8,649		11,073	10,369
変動要因		水田造成	藤川堰用水一部脱退，飛行場等の建設	都市化の進展

面積は，2,437町8反歩となっており，東毛地域の大用水路となっている。

休泊堀はそのときどきの管理者により改良されてきたが，渡良瀬川の流況変化に伴う流量の低下，それに加え開田の進行等もあり，昭和の初期から用水の確保と円滑なる配水を図るため，県営・団体営事業が行われてきた。昭和46年から昭和59にわたり国営渡良瀬川沿岸農業水利事業が実施され，矢場堰は待堰に合口され，上休泊堀の上流基幹部分の改良もなされた。

現在，休泊堀は待矢場両堰土地改良区によって管理されているが，開削以後の主要な経過および主な改良事業，並びに待矢場用水灌漑面積の変動は表-1～3のようである。

IV.　館野ケ原の植林

休泊は用水路の開削による開田の開発だけでなく，館林城の西に広がる館野ケ原の荒野に，休泊堀に着手した永禄元年から，新田金山から松苗を運び植林を始めた。その年は日照りのため大半が枯死し，わずかに根づいたものも農民が抜取って持去ったようで，出発から苦難に突当ってしまった。しかしその後，天正6年（1578）までの20年間にわたって根気よく植林が続けられ，その面積は約586町歩に及び，植林した松は実に150万本に達したと伝えられている。こうした植林によって，明治に至り政府が国有林として管理保護にあたって大谷原官林の基礎が築かれたのである。現在は戦中・戦後の食糧増産のため開墾が行われ，多々良沼の東側にその一部を残すのみとなっている。

V.　むすび

休泊堀は開削されてすでに400年，ほとんど何らかの事業で改修されており，往時の姿と思われる所は，大泉町吉田地内と千代田町新福寺地内の一部だけとなっている。その成果は，単に藩の財政に寄与したのみでなく，今日群馬の穀倉といわれる東毛の水田地帯を築いた大動脈として，地域農業の発展に大いに寄与してきたところであり，今でも東毛の農業開発の祖として崇められ，ゆかりの地は今日なお休泊堀だけでなく，休泊・大谷原などの地名としてみることができる。この名は永く消えることはなかろう。

〔1985. 5. 13. 受稿〕